

七条中学校だより9月16号

京都市立七条中学校

令和8年9月25日

発行：校長 林 秀雄

七条中学校の地下に眠る歴史 発掘調査から分かる七条の昔

七条中学校は今年、創立 70 周年を迎えます。しかし、私たちが毎日学び、生活しているこの場所の歴史は、70 年どころではありません。七条の地には、今から 2000 年以上も前から人々が暮らしていたことが発掘調査によって分かっています。

今回は、七条中学校で行われた二つの発掘調査を、調査が行われた順に紹介したいと思います。

昭和 55 年（1980 年）七条中学校改築工事に伴う発掘調査

「平安京右京七条一坊十四町・衣田町遺跡」

1 つ目の調査は、昭和 55 年に七条中学校の校舎改築やプール建設工事に伴って行われました。

この調査では、平安時代の井戸や建物跡が発見されました。井戸からは土器や木製品、草鞋（わらじ）、小刀などが出土し、当時の人々の暮らしぶりが分かりました。さらに、神様に祈りを捧げる際に用いたと考えられる「斎串（いぐし）」も見つかり、平安時代の人々の信仰の様子もうかがえます。

また、建物跡の中には倉庫と考えられるものもありました。当時、この地域の西側には平安京の大きな市場である「西市」があり、七条中学校周辺には市場を支える人々が暮らしていたと考えられています。

さらに驚くべきことに、平安時代の地面の下からは、約 2000 年前の弥生時代のお墓である「方形周溝墓」も発見されました。

現在の七条中学校の敷地には、弥生時代の人々、平安時代の人々、そして現在の私たちが、時代を超えて暮らしてきたことが分かったのです。

平成 9 年（1997 年）「平安京右京七条一坊」発掘調査

その後、平成 9 年に行われた発掘調査では、さらに詳しいことが分かりました。

調査の結果、この地域は平安京の「右京七条一坊」に位置し、「西市外町」と呼ばれる区域だったことが明らかになりました。

発掘では、建物跡や井戸、柵、道路の側溝などが発見されました。それらを調べることで、この地域には南北に細長い宅地が規則正しく並び、多くの人々が暮らしていたことが分かりました。

また、井戸からは土器や木製品のほか、祭祀に関わる品々も出土しています。これらの発見によって、平安京の人々がどのような家に住み、どのような生活を送り、どのような願いをもって暮らしていたのかが少しずつ明らかになってきました。

平成 9 年の調査は、昭和 55 年の調査で分かった内容をさらに深めるものであり、七条の地が平安京の重要な生活空間であったことを裏付ける成果となりました。

地域の歴史に誇りを

七条中学校は 70 周年を迎えます。しかし、この土地の歴史は 2000 年以上にもわたります。

約 2000 年前の弥生時代の人々。約 1200 年前、平安京の町で暮らした人々。そして、今この七条中学校で学ぶ私たち。同じ場所で、多くの人々が時代をつなぎながら暮らしてきました。

皆さんが毎日歩いているグラウンドや校舎の下には、遠い昔の人々の暮らしの跡が眠っています。発掘された井戸や土器、建物の跡は、かつてこの場所で生活し、働き、家族や仲間とともに日々を過ごした人々が確かに存在していたことを私たちに伝えてくれています。

歴史というと、遠い昔の出来事のように感じるかもしれませんが、歴史は過去の人々だけがつくるものではありません。皆さんが今、授業に取り組み、部活動や学校行事に挑戦し、仲間とともに過ごしている毎日もまた、七条中学校の歴史の一ページです。70 周年という節目の年に学校生活を送っている皆さんは、伝統を受け継ぐとともに、これからの七条中学校の新しい歴史を創っていく存在でもあります。

七条という地域が積み重ねてきた長い歴史に思いをはせるとともに、自分たちもその歴史の延長線上にいたいと感じてほしいと思います。そして、ふるさと七条への誇りと愛着をもちながら、仲間とともに充実した学校生活を送り、未来の後輩たちへと新たな歴史をつないでいってほしいと願っています。

裏へ

西市とはどのような場所だったのか？

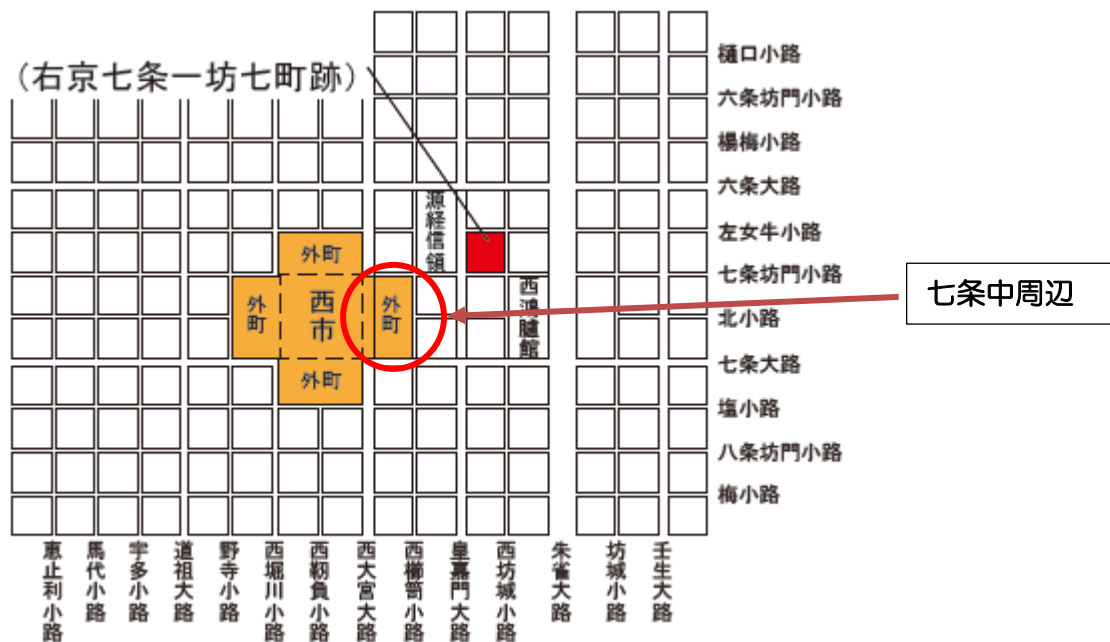
当時、この地域の西側には平安京の大きな市場である「西市（にしいち）」がありました。西市は、平安京が造られた際に設けられた公営市場で、東側の「東市」と並んで都の経済を支える重要な施設でした。全国各地から米や野菜、魚介類、布など様々な品物が運び込まれ、多くの人々にぎわっていたと考えられています。現在でいえば、卸売市場と商店街を合わせたような役割を果たしていた場所でした。

令和6年度に京都市中央卸売市場の整備に伴って行われた発掘調査では、西市に近い場所にあたる「平安京右京七条一坊七町跡」から、平安時代前期の井戸が発見されました。この井戸からは、「小魚口」と書かれた木簡（もっかん）が出土しています。木簡は荷物の管理や運搬の際に付ける札として使われたものと考えられており、当時この地域で魚などの食料が取り扱われていたことを示す貴重な資料です。しかも、「小魚」と書かれた木簡の出土は平安京では初めての事例でした。

さらに、井戸からはアワビやハマグリとみられる貝類も見つかりました。アワビは当時、遠く離れた海沿いの国々から朝廷へ納められていた高級な食材です。このことから、西市周辺には全国各地から様々な食材や品物が集まり、人々の暮らしを支えていたことが分かります。

興味深いことに、西市は平安時代中期以降に衰退して姿を消しましたが、その後もこの地域は「食」を支える場所としての役割を受け継いできました。そして昭和 2 年（1927 年）には、現在の京都市中央卸売市場が開設されます。現在でも毎日、多くの野菜や果物、魚などが集められ、京都の人々の食生活を支えています。

また、七条中学校の近くには七条商店街もあります。1200 年前の西市と現代の中央卸売市場や商店街とでは形や仕組みは異なりますが、「人が集まり、物が集まり、人々の暮らしを支える場所」という点では共通しています。七条中学校の周辺は、平安時代の西市から現代の京都市中央卸売市場へと続く、『京都の食と物流を支えてきたまち』とも言えるでしょう。



学校がさらに美しくなりました

この連休中に、学校敷地内の樹木の剪定作業が行われました。グラウンド周辺や校舎南側、学校周辺の木々の枝が整えられ、学校全体がとてもすっきりとした印象になりました。作業に携わってくださった皆様のおかげで、見通しが良くなり、安全で気持ちのよい環境が整いました。普段私たちが何気なく過ごしている学校は、多くの方々の支えによって維持されています。こうした環境整備に感謝の気持ちを持ちたいものです。いよいよ体育の部が近づいてきました。整備されたグラウンドは、皆さんが練習の成果を発揮する舞台となります。仲間と力を合わせ、励まし合いながら、一人ひとりが全力で挑戦する姿を期待しています。美しく整った学校で学び、活動できることに感謝しながら、めていきましょう。学校全体で、思い出に残る素晴らしい体育の部をつくり上

